



新薬学者集団 2023 年度講演会

731 部隊と大学－未来への考究のために－

吉中文志

はじめに

私は「15 年戦争と日本の医学医療研究会」や「戦争と医の倫理の検証を進める会」で 20 数年にわたって活動してきました。731 部隊の本部があった中国東北部のハルビンを繰り返し訪問して調査研究を行ってきました。

2022 年 4 月に京都大学学術出版会から「七三一部隊と大学」を出したのは、日本の医療界が再び同じ過ちを繰り返してはいけないという問題意識とともに、731 部隊を振り返ることでヘルシンキ宣言に代表される医の倫理を東アジアからさらに深めていく契機にしたいと考えたからでした。特に、防衛 3 文書^(注)見直しが行われ、医学、医療の戦争動員が進みつつある現在では、その重要性は増しています。

(注) 防衛 3 文書：国家安全保障戦略, 防衛計画の大綱 (防衛大綱), 中期防衛力整備計画 (中期防) のこと。

731 部隊を宿した戦間期

731 部隊が活動した時期は 15 年戦争の時期に当たります。1931 年の満州事変から 1937 年の日中戦争を経て 1945 年の終戦までの 15 年です。奉天 (現在の瀋陽) 郊外柳条湖付近の南満洲鉄道線路で関東軍が爆発事件を起こした謀略が満州事変です。これを機に満州を関東軍が制圧して傀儡国家である満州国を作りました。対ソ戦略の上で重要な位置にあり石炭などの資源が豊富であった満州は、不況からの脱却のためにも日本にとって重要な場所でした。そのため、王道楽土、五族協和など理想的なスローガンを掲げて大陸への進出が本格化したのです。

これに先立つ10年余りは第一次世界大戦が終わり、次の第二次世界大戦に向かった時期で戦間期とも呼ばれます。スペイン風邪（インフルエンザ）、関東大震災、大正デモクラシー、国際連盟の結成、パリ不戦条約締結、世界大恐慌など、戦争と平和の間に大きく揺れた時代です。科学技術の進歩が目覚ましくフォード式の大量生産体制が普及した時代でもあります。

また、第二次世界大戦が準備された時代でもあったわけで、防衛3文書の改訂を経て「新たな戦前」と形容されるに至った現在との類似性に着目すべきでしょう。現在、専守防衛を敵基地攻撃能力に変え、中国を仮想敵国とみなして戦力強化が進められています。戦間期を振り返ることによって「新たな戦前」に警戒し、戦争へ向かう芽を摘み取って、かの戦間期には実現しなかった戦争違法化をめざすことが重要だと考えています。

731部隊はどんな部隊か

日本軍による非人道的な人体実験は中国で始まりました。731部隊はその典型です。関東軍防疫給水部として中国東北部（現黒竜江省）のハルビン郊外に設置されました。非人道的な人体実験を秘密裏に行った巨大な研究施設です。石井四郎軍医中将（京都大学医学部卒業の軍医階級は終戦時以下、石井）が主導しました。1932年に陸軍軍医学校（新宿戸山）に防疫研究室を発足させたのが全ての始まりです。

石井はハルビン南東の背陰河に秘密の研究施設を作って主に軍医を送って人体実験を始めました。被験者にしたのは抗日運動活動家です。脱走事件が起きた経緯もあり、やがてハルビン郊外（現平房区）に生体実験を秘密裏に行うための特別な一大研究施設の建設が決まります。本論文では1932年の防疫研究室以降の一連の組織を731部隊と呼んで話を進めます。

ハルビンの研究施設は約5 km四方の敷地で飛行場や引き込み線がある広大なものでした。最盛期 3,000人の研究者や要員が従事していました。研究施設の中核部分は高压電流の有刺鉄線と土堀で囲まれ、外部から完全に遮断されていました。実験施設の建物は「ロ」の字型をしており、「マルタ」と呼ばれた被験者を閉じこめておく特設の監獄が二つ設けられていました。

731部隊は細菌兵器や毒ガス兵器（以下、BC兵器）の研究開発を行いました。また、兵士の凍傷防止など寒冷馴化のための研究なども行いました。兵士の健康を保つ防疫給水の任務とともに細菌兵器開発（ワクチン開発を含む）などの軍事研究が重要な任務でした。同時に細菌戦を実行し実戦で効果を検証する活動も行いました。

非人道的な人体実験

平房の特設監獄はきわめて厳重な構造になっており、ここから生きて出られた人は1人もいませんでした。ソ連参戦後の731部隊が撤退する時に生き残っていた被験者も、証拠隠滅のために全員殺されました。

731部隊で行われた人体実験は多岐に及びます。まとめれば次のようになります。

(1) 感染実験

ペスト、炭疽、鼻疽、チフス、コレラ、赤痢、流行性出血熱などの感染実験が行われました。被験者を各種病原体に感染させて経過を観察しました。感染の進行に伴う生体の変化が

記録され組織標本が残されました。病原体の感染力（毒力）測定、病原体の感染力（毒力）強化、未知の病原体の探索などが目的でした。

(2) 治療法やワクチン開発

手足を人為的に凍傷にしてぬるま湯や熱湯で温めて回復過程を調べた凍傷実験が有名です。開発中のワクチンを投与した後に当該病原体を感染させて有効性を確かめる実験も広く行われました。南方軍防疫給水部（シンガポール）がインドネシアで行った破傷風ワクチン実験では400人が死亡しました。

(3) 人体の生理学的限界試験

人体の生理学的な限界についての知見を得るために、内地では実施できず観察できない実験が行われました。空気を血管に注射する実験、気密室に入れて減圧する実験、食事や水分を断つ飢餓実験、蒸留水だけを与える実験、失血実験、感電実験などです。

(4) 細菌兵器、毒ガス兵器の殺傷力試験

被験者に対してペストノミを装填した細菌爆弾を用いて感染の発生率を調べる実験が行われました。より実践的な野外実験場で飛行機を使った投下実験も行われました。毒ガスについても同様の実験が行われました。

実は、こうした非人道的で残虐な行為は他にも行われています。陸軍病院では軍医に対して被験者を使って手術演習が行われました。被験者の虫垂切除、四肢切断、気管切開などです。銃創を作って弾丸摘出、止血処置や馬の血を輸血するなどの実験も行われています。また、軍医が被験者の脳下垂体を取り出して製薬会社に売っていたという報告もあります。

日本人関係者の証言

実際の実験の様子は次のような関係者の証言から知ることができます。

・私は実験に関する吉村（生理学者、戦後京都府立医科大学長に就任）の報告を読みました。映画も撮影されていました。画面に足錠を嵌められた人間が4～5人、防寒服を着、手には何も纏わず表に引出されて来る場面が現れ、ついで大形の扇風機が人工的方法によって凍傷を早めます。それから、手が完全に凍傷にかかったかどうかを点検するため、手を小さい棒で叩く所が上映され、続いて、凍傷にかかった人間が部屋に入れられる所が上映されます。吉村は、この研究が将来対ソ戦を目的として行われているのだと私に語りました（731部隊訓練教育部部長 西俊英）。

・其処には長椅子に5人の中国人の被実験者が坐っていましたが、此等の中国人の中二人には、指が全く欠け、彼等の手は黒くなっていました。3人の手には骨が見えていました。指は有るには有りましたが、骨だけが残っていました（731部隊憲兵隊 倉員サトル）。

・安達試験場で、「被験者」の手足を十字架に縛りつけ、鉄板を胸に当て、円形に並ばせました。円の中心に細菌弾を置き爆発によって、ペスト菌やコレラ菌、炭疽菌を飛び散らせました。観察者は、その場から4,000 m離れました。彼らはタイマーをセットして爆発させ、「被験者」の感染を観察したのです（輸送班石井付運転手 越定男）。

731部隊の非人道的人体実験について聖路加国際病院の理事長だった故日野原重明先生は朝日新聞(2005年12月10日)の「開戦日を風化させるな」という記事で次のように書いておられます。「私が京都大学の医局や院で学んでいた時のことです。大学の先輩で、ハルビン市の特殊部隊(731部隊)に所属していた石井四郎軍医中將が、現地での捕虜待遇の様子を収めた写真フィルムを持って母校を訪れました。そのフィルムには、捕虜兵の生体実験が映っていました。腸チフス、ペスト、コレラなど伝染病の病原菌を感染させてから死亡するまでを観察したものでした。見るに耐えられない行動を映した映像の記憶に、今でも鳥肌がたちます」。このフィルムは見つかっていないのですが、こうした講義は金沢大学でも行われていたことがわかっています。731部隊が行っていた非人道的な人体実験の事実は医学界では広く知られていたといつてよいと思います。

細菌戦と毒ガス戦

731部隊は非人道的な人体実験、研究を行っただけではありませんでした。開発した細菌兵器や毒ガスを使って実戦も行いました。これらの実験も実戦も戦争犯罪に該当するものでした。

731部隊は、ペスト、腸チフス、コレラ、流行性出血熱、炭疽などの病原菌を兵器化しました。そして、ノモンハン(1939年)、寧波(1940年)、衢県(1940年)、常德(1941年)、金華(1942年)などで実際に細菌戦を実施しました。とりわけ、常德と金華における作戦では大規模なペスト菌散布が行われました。731部隊によるペスト菌などの散布によって戦後も長年にわたり疫病が流行した地域もありました。731部隊によって開発されたペスト菌散布方式は、ペストに感染させたマウスにノミをたからせて十分に血液を吸わせたうえで、遠心分離機によってペスト菌を呑み込んだノミだけを取り出し、陶器製の爆弾に充填して投下する、というものでした。

陸軍の毒ガス使用は1937年7月から1944年7月まで中国全土に及びました。陸軍はその違法性を認識していました。当初は催涙性ガス(みどり剤)、やがてくしゃみ性・嘔吐性ガス(あか剤)、1940年からは糜爛性ガス(きい剤、マスタードガス)が使われました。ちなみに第二次世界大戦で、日本軍以外で毒ガスを使ったのはイタリア(エチオピアとリビア)でした。

日本軍のBC兵器による被害者は、細菌戦死亡者1万人、毒ガス戦死亡者10万人とされています。これらの細菌戦、毒ガス戦の事実は中国の被害者家族が日本政府を相手取って起こした国家賠償訴訟において日本の裁判所によって事実認定されています。

被害者の視点の大切さ

著書「七三一部隊と大学」では中国の若手研究者が英文で出版した「UNIT731」の翻訳を入れました。731部隊に関する様々な方向からの考究はその後に配置する構成にしました。神戸大学医学部感染症内科の岩田健太郎教授は本書を医学医療関係者必読としたうえで、中国人の英語論文を和訳して紹介するのは斬新で素晴らしいとして氏のPodcastで紹介されました。なかなかの慧眼だと敬服した次第です。

中国人研究者の本を第一部において紹介したのは、731部隊の歴史を振り返る際に被害者の視点が欠かせないと考えたからです。核兵器廃絶に向けた運動では被爆者の方々が運動の中心軸にあり、その証言や発言が運動の大きな力になって進んできました。被害者の立場から731部隊の歴史を振り返ることの重要性を強調したいと思います。

731部隊で「マルタ」にされた人たちには生存者がなかったこともあって、731部隊の研究では犠牲者の視点が相対的に弱かったように思います。犠牲者の家族、あるいは中国の人たちの視点を731部隊の考究の中に据えたいと考えました。

731部隊に送られて実験で殺された李鳳琴さんのお父さんは鉄道の電気技師でした。当時の中国では教育を受けて国を背負うべき技術者でした。日本の侵略に対する抗日運動に加わっていたために憲兵隊に捕まり、裁判なしに731部隊に送られて犠牲になりました。李さんは日本政府に対する損害賠償を求める訴訟の原告の一人になりました。裁判のために訪日された際（2010年）に、当時の東大医学長（清水孝雄先生）と京大医学部長（光山正雄先生 「七三一部隊と大学」執筆者）との面会が実現しました。謝罪の言葉を通じて、被害者家族と日本の代表的な医学研究者との間で心が通った瞬間だったように思いました。

参考資料

1) 吉中丈志編. 七三一部隊と大学. 京都大学学術出版会, 2022, 561ページ.

(公益社団法人京都保健会理事長 よしなか・たけし)